文化財保護課

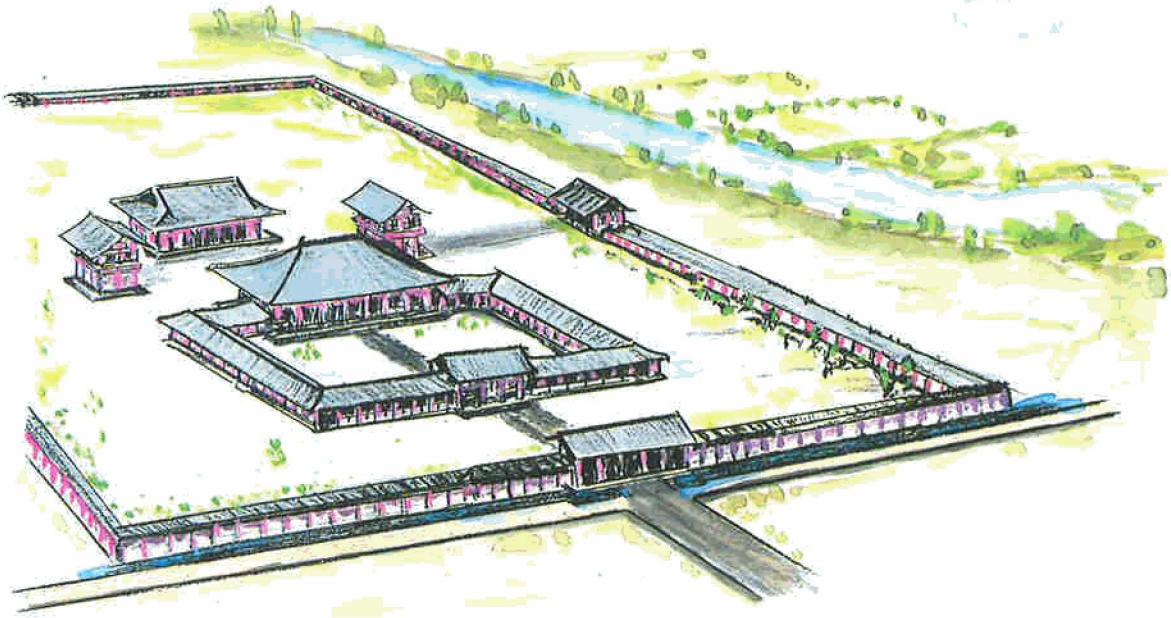
# 上野国分尼寺寺域確認調査

元総社蒼海土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財確認調査報告書

2000. 3

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 上野国分尼寺寺域確認調査



上野国分尼寺復元図

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

# 序

前橋市は、北に赤城山がそびえ、南に関東平野が開け、市内中央を流れる利根川がその関東平野を貫流しています。山紫水明にあふれ、四季の彩り豊かなまちであり、水と緑と詩のまちとして、文化あふれるまちであります。

前橋は28,000年前の旧石器から、近代化遺産にいたるまでの長い歴史を持っています。特に古墳時代には全国有数の古墳が所在する地域であり、国内有数の勢力がいたものと考えられます。

前橋市元総社町には古代上野国の政治の中心であった国府が置かれた地であり、周辺には国分寺、国分尼寺も造られました。

上野国分寺は現在整備が進められており、塔基壇・築垣等が復原されています。上野国分尼寺については、過去に一部の調査が行われましたが、寺域等不明な点が残されていました。

本年度の調査は、区画整理事業実施に伴う発掘調査として実施されましたが、国分尼寺の南辺とみられる溝とその南を東西に通る道路等の重要な資料を得ることができました。これらの資料は、今後国分尼寺を保存・整備していく上に極めて重要な成果であります。

調査にあたりましては、区画整理第二課、地元地権者を始めとする関係の方々に御協力をいただきました。厚くお礼申し上げます。

平成12年３月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団　長　　渡　辺　勝　利

# 例　　言

1．本報告書は、区画整理事業に伴う上野国分尼寺寺域確認調査報告書である。

2．本遺跡は、群馬県前橋市元総社町字小見1730他に所在する。

3．発掘調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団で実施した。

4．発掘・整理担当及び調査期間は次のとおりである。

　発掘担当者　：　眞塩明男、飯田祐二、佐藤則和、小峰　篤、平石和明

　整理担当者　：　眞塩明男、飯田祐二

5．本書の原稿執筆編集は眞塩・飯田が行った。

　なお、「Ⅳ　調査の概要」の原稿執筆については、井上唯雄が行った。

6．調査・整理にあたっては、

　石原義夫、岩木　操、岸フクエ、渡木秋子、中澤光江、平林しのぶ、湯浅たま江、湯浅道子、赤城美代子、船津明美、松田富美子のご協力を得た。（順不同）

7．発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

# 凡　　例

1．挿図中に使用した北は、座標北である。

2．挿図には建設省国土地理院発行の1/25,000地形図（前橋）と前橋市役所作成の1/2,500前橋市現形図を使用している。

3．本遺跡の略称は、11A99である。

4．遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

　遺　　構：トレンチ全体図…1/200、トレンチ断面図・平面図…1/100

　遺　　物：土器…1/3、瓦拓本…2/3

# 目　　次

序 …… i

Ⅰ　調査に至る経緯 …… 2

Ⅱ　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の立地 …… 2
　2　歴史的環境 …… 2

Ⅲ　発掘調査の方法と経過
　1　調査方法 …… 4
　2　調査経過 …… 4

Ⅳ　調査の概要
　1　調査の概要 …… 5
　2　遺構 …… 5
　3　出土遺物 …… 13
　4　まとめ …… 16

## 図　　版

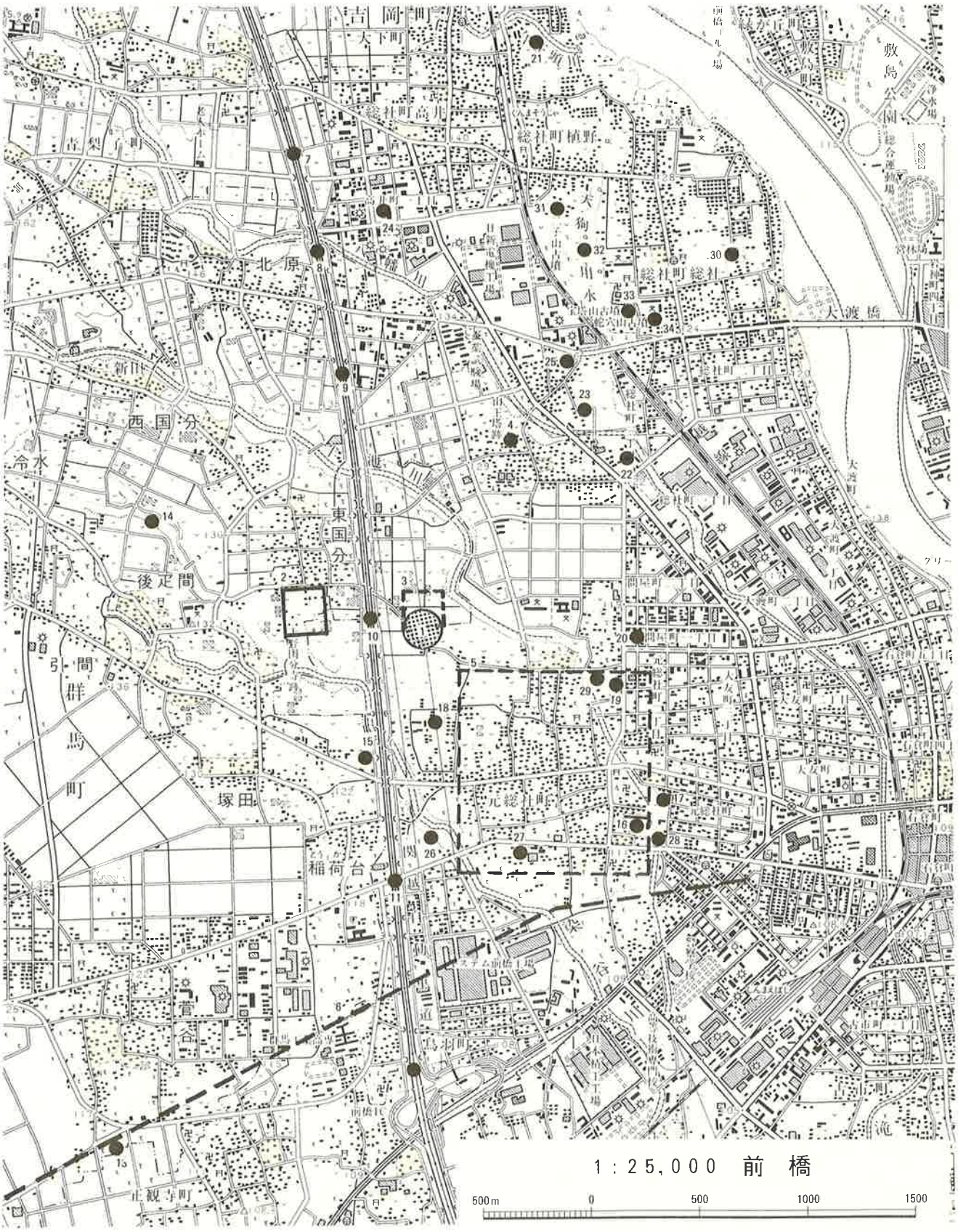
P L.　1　1トレンチ全景、1トレンチ北端断面図
　　2　1トレンチ住居跡全景、1トレンチ住居跡遺物出土状況
　　3　2トレンチ全景、3トレンチ全景
　　4　4トレンチ全景、5トレンチ全景
　　5　6トレンチ全景、調査地
　　6　出土遺物

## 挿　　図

Fig.　1　遺跡位置及び周辺遺跡図 …… 1
　　2　調査区周辺図 …… 3
　　3　トレンチ全体図 …… 8
　　4　1・2トレンチ断面平面図 …… 10
　　5　3・4トレンチ断面平面図 …… 11
　　6　5・6トレンチ断面平面図 …… 12
　　7　1トレンチ住居跡出土遺物 …… 14
　　8　出土瓦拓本 …… 15
　　9　上野国分尼寺調査図 …… 18
　　10　上野国分僧寺尼寺配置図 …… 20

## 表

Tab.　1　各トレンチの調査概要 …… 7
　　2　土器観察表 …… 13
　　3　各トレンチにおける瓦の出土状況 …… 14




1．上野国分尼寺寺域確認調査　2．上野国分寺跡　3．上野国分寺尼寺跡　4．山王廃寺跡　5．上野国府推定地　6．推定東山道　7．下東西遺跡　8．北原遺跡　9．国分境遺跡　10．僧寺・尼寺中間地域　11．鳥羽遺跡　12．中尾遺跡　13．菅谷遺跡　14．後疋間遺跡　15．塚田村東遺跡　16．元総社小学校校庭遺跡　17．元総社明神遺跡　18．草作遺跡　19．閑泉樋南遺跡　20．閑泉樋遺跡　21．桜ケ丘遺跡　22．昌楽寺廻向遺跡　23．大屋敷遺跡　24．柿木遺跡　25．村東遺跡　26．弥勒遺跡　27．天神遺跡　28．寺田遺跡　29．総社閑泉明神北遺跡　30．遠見山古墳　31．総社二子山古墳　32．愛宕山古墳　33．宝塔山古墳　34．蛇穴山古墳

Fig. 1　位置図及び周辺遺跡図

# Ⅰ　調査に至る経緯

本確認調査は、前橋都市計画事業元総社蒼海地区土地区画整理事業に先立づ上野国分尼寺寺域確認調査として、平成12年３月14日から18日にかけて行われた。

平成12年３月７日付けで前橋市長　萩原　弥惣治（前橋市都市整備部区画整理第二課）より前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団に元総社蒼海地区土地区画整理事業に先立つ国分尼寺域の確認調査の依頼が提出された。これを受け同年３月８日、前橋市長　萩原　弥惣治と前橋市埋蔵文化財発掘調査団　団長　渡辺　勝利との間で委託契約が締結され、３月14日に現地での確認調査を開始した。

# Ⅱ　遺跡の位置と環境

## １．遺跡の立地

上野国分尼寺寺域確認調査は、前橋市街地（県庁付近）から利根川を隔てて、西約３㎞の地点、前橋市と群馬町との境に位置する地点で実施した。調査地の地番は、前橋市元総社町字小見1730他である。

本確認調査地は、榛名山東南麓に形成された扇状地末端部に染谷川、牛池川の両河川に挟まれた低台地上に位置し、北側では昭和44・45年度に群馬県教育委員会が調査を行った際に講堂跡、金堂跡、中門跡が確認されている。昭和36年に耕地区画整理事業が施行され、昔日の様子をうかがえる土地区画はほとんど消滅しているが、土地の起伏には若干の変化がある。国分尼寺推定地は周辺部よりわずかに高い地形を形成し特に南側及び東側では土地の高低差が残っている。南方には県道前橋足門線が東西に、西方には関越自動車道が南北に走る。周辺はまだ農地が広がり、のどかな景観を保っているが、宅地化が進んできている。

## ２．歴史的環境

上野国分尼寺跡の存在するこの地域は、奈良時代における群馬県の政治文化の一大中心地であった。周辺の遺跡に目を向けてみると、国分尼寺を含む地域には縄文時代から近世に至る多くの遺跡が存在する。染谷・牛池川沿岸の台地からは縄文土器の破片が比較的多く発見されており、西約700ｍに位置する上野国分僧寺や尼寺中間地域遺跡では縄文中期から中世の集落跡が検出されている。古墳時代になると王山古墳・総社二子山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳といった６世紀前半から古墳時代終末期に造られた総社古墳群が北東約1.8㎞に位置する。特に宝塔山古墳や蛇穴山古墳の石室や石棺造りには仏教の影響が考えられる。古墳文化から仏教文化への移行期の古墳であり、山王廃寺跡出土の石製品の技法にも共通するものがある。その山王廃寺跡は白鳳期の建立と考えられ、国分尼寺跡と総社古墳群の中間で牛池川を挟んだ対岸地点に存在する。塔心礎や石製鴟尾の石造品や出土遺物などから大規模な寺院であったことがうかがえる。奈良時代になると南東約１㎞付近に上野国の政庁である国府がつくられ、その後、西に国分寺、当地に国分尼寺が建立され政治・文化の中心地となった。

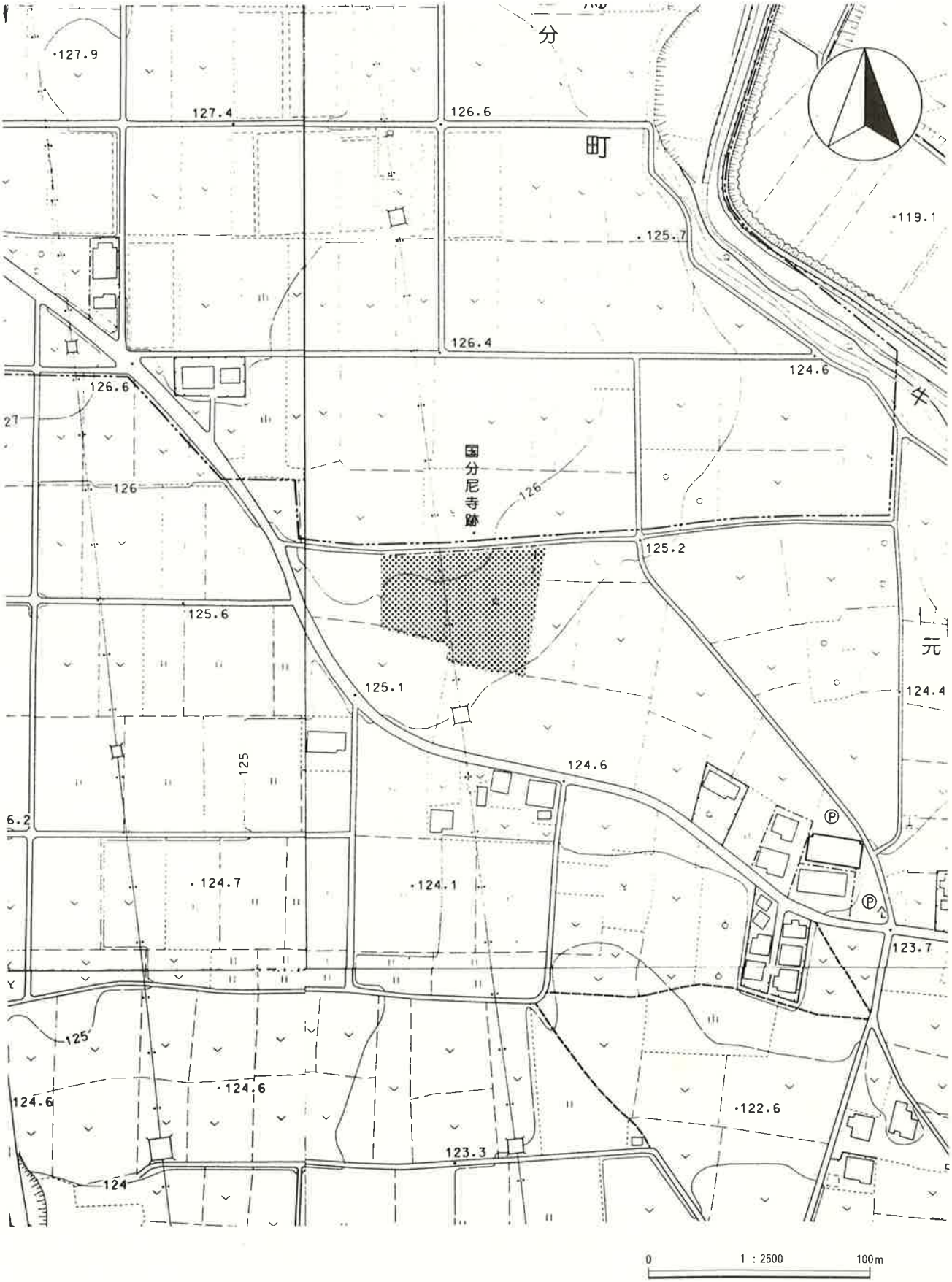

分
町
国分尼寺跡
127.9
127.4
126.6
125.7
119.1
126.4
124.6
126.6
126
125.2
125.6
125.1
124.4
124.6
125
124.7
124.1
123.7
125
124.6
124.6
122.6
123.3
124
0
1 : 2500
100m

Fig. 2 調査区周辺図

# Ⅲ　発掘調査の方法と経過

## 1．調査方針

調査地は昭和44・45年度調査の結果から推定された国分尼寺南限部分にあたる敷地約218㎡である。現地は果樹園及び畑地であり、果樹や作物を避けるように南北方向に走行するトレンチを６本設定し、東から１トレンチ、２トレンチと呼称することにした。

調査範囲をカバーする４ｍグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は、東西方向はＸ軸とし西から東へＸ１、Ｘ２、Ｘ３・・・とし、南北方向はＹ軸とし北から南へＹ１、Ｙ２、Ｙ３・・・で表し、グリッドの呼称は北西杭の名称を使用した。

なお、Ｘ18・Ｙ７の公共座標は

第Ⅸ系のＸ＝＋43672.000、Ｙ＝－71928.000、

緯度36°23′27″.4678、経度139°01′53″.1845である。

## 2．調査経過

現地調査は平成12年３月14日から３月18日までである。

３月14日　調査区東側は果樹園であるため、果樹と果樹の間を掘削していった。掘削を追うように精査をしていったが、強風のため遺構を精査してもすぐに砂が積もってしまう状態であった。１～４トレンチの掘削を終了し、各トレンチの北側部分で大小２本の溝とその間に挟まれた堅緻面が東西に延びることを確認した。また、東京電力の高圧線が直上に位置する４トレンチ掘削の際には東京電力の方に立ち会っていただき、細心の注意を払いながら掘削を行った。

３月15日　調査区西側の畑地の掘削を開始、追って精査をしていくが、前日同様強風のため砂が積もる状態であったため、各トレンチを精査→写真撮影→図面作成の順で記録をとっていった。検出された北側の大きい溝の方が、国分尼寺南限区画溝、堅緻面が道路状遺構、南側の小さい溝が道路の側溝になる可能性が高いことが判明する。区画整理第二課、文化財調査委員　近藤　義雄氏、県教委文化財保護課、県埋文事業団、群馬町教委の方々に来ていただき遺構を確認してもらった。

３月16日　雪や雨の降るなかトレンチの精査・写真撮影・図面作成を行った。１トレンチで道路状遺構を掘り込む形で住居跡と土器を検出した。県教委、県埋文事業団の方々が視察に来た。

３月17日　残るトレンチと１トレンチの住居跡の精査・写真撮影・図面作成を行った。県埋文事業団の方が視察に来た。記録が終了したトレンチから埋め戻しを開始した。

３月18日　すべてのトレンチの埋め戻しを完了し、現地調査を終了した。

# Ⅳ　調査の概要

## 1．調査の概要

今回の調査対象地は、従前より尼寺南限部分に想定されていたが、その確たる遺構は未確認であった。ここは、東西方向に走る農道を境に北は群馬町、南が前橋市の地籍となっている。この内、東西70ｍ、南北40ｍほどの範囲が今回の調査対象とされたが、その内、前橋地籍の道路南側部分を調査した。

トレンチは上物（果樹と耕作物）との関連で適宜６本設定したが、東から第１トレンチとし、以下第６トレンチまで設定した。その間隔は東から12ｍ、12ｍ、13ｍ、13ｍ、10ｍの間隔で設定した。尚、従来の調査で確認された講堂跡の南北中軸線に最も近似するトレンチは第４トレンチであるが、直接想定中軸線に合わせることはできなかった。

トレンチの掘削は、ユンボのバケット幅で行い、遺構面については手掘りで対応することとした。その結果、各トレンチとも、トレンチ北限の道路敷部分で、ロームの削り残し部分を検出し、その南に溝、道路とみられる部分を検出し、一部竪穴住居を確認した。以下、各トレンチについて概略を述べることとする。

## 2．遺　　構

以下、設定されたトレンチ毎の所見を示すが、北側ローム削り出し面は築垣基壇部、その外に溝部、その南にローム面が立ち上がる部分を側溝で区画した部分は道路状遺構とみられる。

### (1)　第１トレンチ

最も東に設定されたトレンチである。道路敷部分では、現地表面下80cmほどで固くしまった暗褐色土層を確認し、更にその下層にあるロームの削り残し部分を下幅100cm、高さ60cmで確認した。この削り出し部分は比較的急傾斜で立ち上がっている。

その南側には溝状の掘り込みがローム削り出しの下面と底面をそろえて確認された。その幅は南側立ち上がりが竪穴住居跡と重複するため明確さを欠くが、特にAs－B軽石層が第６層中に認められることから、この溝が古代のものであることが確認された。埋土中から瓦片群が出土している。

このトレンチでは、溝の南限に重なるように竪穴住居跡が検出された。この竪穴住居跡は溝の底面から20cmほど上位に踏み固められた床面をもち、トレンチ内での確認では南北2.3ｍで東壁に竈をもつ住居跡である。竈の袖には丸瓦の破片を使用していた。遺物は須恵器坏４個と高台埦２個が確認された他、「コ」の字口縁の甕片を検出している。

住居跡の南側はローム面が残っているが、上面に道路側溝の立ち上がりを認められる層を確認することができる。

### (2)　第２トレンチ

道路敷下に近い部分でローム削り残し部分が確認された。幅80cm、高さ30cmほどで急傾斜に削り出されている。その上に30cmほど固くしまった暗褐色粘土層が確認される。

表土からは100cmの深さである。

その南に掘られた溝は、幅約2.7mで現地表より1.3mの深さで溝底に達する。As－B軽石層は、溝底から43cmほどの間層をおいて一部純層が確認できる。埋土中から比較的多量の瓦片が出土している。南側ロームの立ち上がりは北側にくらべてゆるやかに鋭角に立ち上がっている。

更にその南のロームは幅4.4mで南端に側溝を伴っている。上面は側溝南側とくらべてもあまり固くない。

### (3) 第3トレンチ

北側部分は北から幅140cm、高さ1mにわたる築垣基壇面が、ローム層を削り残す形で形成されている。ローム層上に固く締まった暗褐色土層が積まれている。傾斜は比較的急で約50度ほどの角度を形成している。現地表下90cmで国分尼寺の遺構面に達している。掘り込みの深さは現地表下で1.5mである。

その南には溝が掘られている。南側のローム面との関連でみると上幅5.6m、下幅4.2mで溝内にはレンズ状に埋土が入っている。As－B軽石層は溝底面から35cm上がった点で部分的に純層が確認されている。現地表下でみると溝底は1.4m下になっている。

その南にはローム面が溝底から1m高い位置に幅5mで認められる。この部分は南限が上幅2.4m、深さ30cmのV字溝で区画される。その上面は平らで特に硬化面が認められ、表面に瓦片が敷きつめられている。表面が露出していたとみられ、鉄分が凝集している。硬化面上はかなり硬く、川砂の堆積も認められる。その状況から道路面と認識された。この硬化面は更に西へ5m以上続く状態が確認された。

### (4) 第4トレンチ

トレンチ北側部分はロームを削り出した部分が幅1.8m、高さ90cmで緩傾斜で立ち上がっている。その上面は固くしまった暗褐色土層がのっている。3トレンチに比較するとややローム面が南にのびている感じがするが、中軸線に近いこともあって、南大門などとのかかわりもあって広くなっている可能性がある。現地表面からの深さは75cmで遺構面に達する状況となっている。

その南側には、上幅5.1m、下幅4.4mの溝が現地表面下1.6mで溝底が検出されている。当時の地表面からの掘り込みの深さは90cmである。溝は完掘していないが、溝の南立ち上がりは明瞭で、状況は比較的明確にとらえることができる。As－B軽石は溝底より40cmほどの高さに一部純層をまじえて検出されている。溝南側部分はローム面が立ち上がり現表土下70cmまで確認できる。南側溝は消滅しており、正確な幅は不明であるが、約4.4m地点でやや土層の乱れが認められ、表土が削平されたための消滅であろう。

### (5) 第5トレンチ

この部分は旧地盤が下がっているため、北側ローム面は現地表下1.8mである。道路部分への掘削を避けたため、ローム面の立ち上がりを確認するに至らなかったが、削り出し面もローム上層の褐色土層を含めているところが、第4トレンチまでの状況と異なっている。As－B軽石層の堆積も溝底から2層目、下面に認められた。

溝幅は上面で6.2m、下面で5.4mで深さは現地表より1.7m、当時の地表面から80cm下がった地点である。堆積土の中には川砂状のものは見られず、空堀であった可能性が強い。

その南のローム面は南側溝での幅が4.4mと平坦面が続き、その南に幅1.5m、深さ30cmほどの側溝がつく。

## (6) 第6トレンチ

基本的には、第5トレンチと大差はない。ただ、基盤面が下がることから地表より1.7m、当時の地表面より90cm下層から溝底が検出される。北側はローム及び褐色土層を削り出している模様だが、道路敷を断ち割っていないため詳細は不明である。

溝は上幅4.1m、下幅3.8mの逆台形状で当時の地表から85cmの深さを掘り込んでいる。瓦片の流れ込みは量的に少ないことが目立つ。

溝南限のローム面の立ち上がりは明瞭に確認されたが、南側溝は上面が削平されたか、検出されないため幅は不明瞭で、上面にも硬化面は認められない。

Tab. 1　各トレンチの調査概要

| トレンチ | 築垣基壇 | 溝 | 道路状遺構 |
|---|---|---|---|
| 1 | 検出面：現地表面下80cm<br>ロームの削り出し高60cm<br>その上面に20cm盛土 | 溝底　現地表面下1.3m<br>As－B層　溝底上15cm | 道路を破壊して竪穴住居（10世紀初頭）<br>住居床面黒色土（埋土）中 |
| 2 | 検出面：現地表下1m<br>ロームの削り出し高35cm | 溝　上幅3.0m以上<br>溝底　現地表下1.7m | 路面幅4.4m<br>路面　硬化面を欠く |
| 3 | 検出面：現地表下1.1m<br>ローム削り出し面1.4m | 溝　上幅5.5m　下幅4.5m<br>As－B層　溝底上35cm | 路面幅4.4m<br>南側溝幅2.9m、深さ30cm<br>上面瓦敷き |
| 4 | 検出面：現地表下75cm<br>ローム削り出し面90cm | 溝　上幅5.1m　下幅4.4m<br>溝深さ90cm（ロームまで）<br>未完掘 | 路面幅4.4m<br>南側溝消滅 |
| 5 | 検出面：不明<br>ローム面確認のみ | 溝　上幅6.0m以上　下幅5.4m<br>ロームより80cm | 路面幅4.6m<br>南側溝幅1.5m<br>深さ30cm |
| 6 | 検出面：不明<br>原地形下がる | 溝　上幅4.1m以上　下幅3.8m<br>ロームより85cm | 路面幅不明<br>南側溝消滅 |

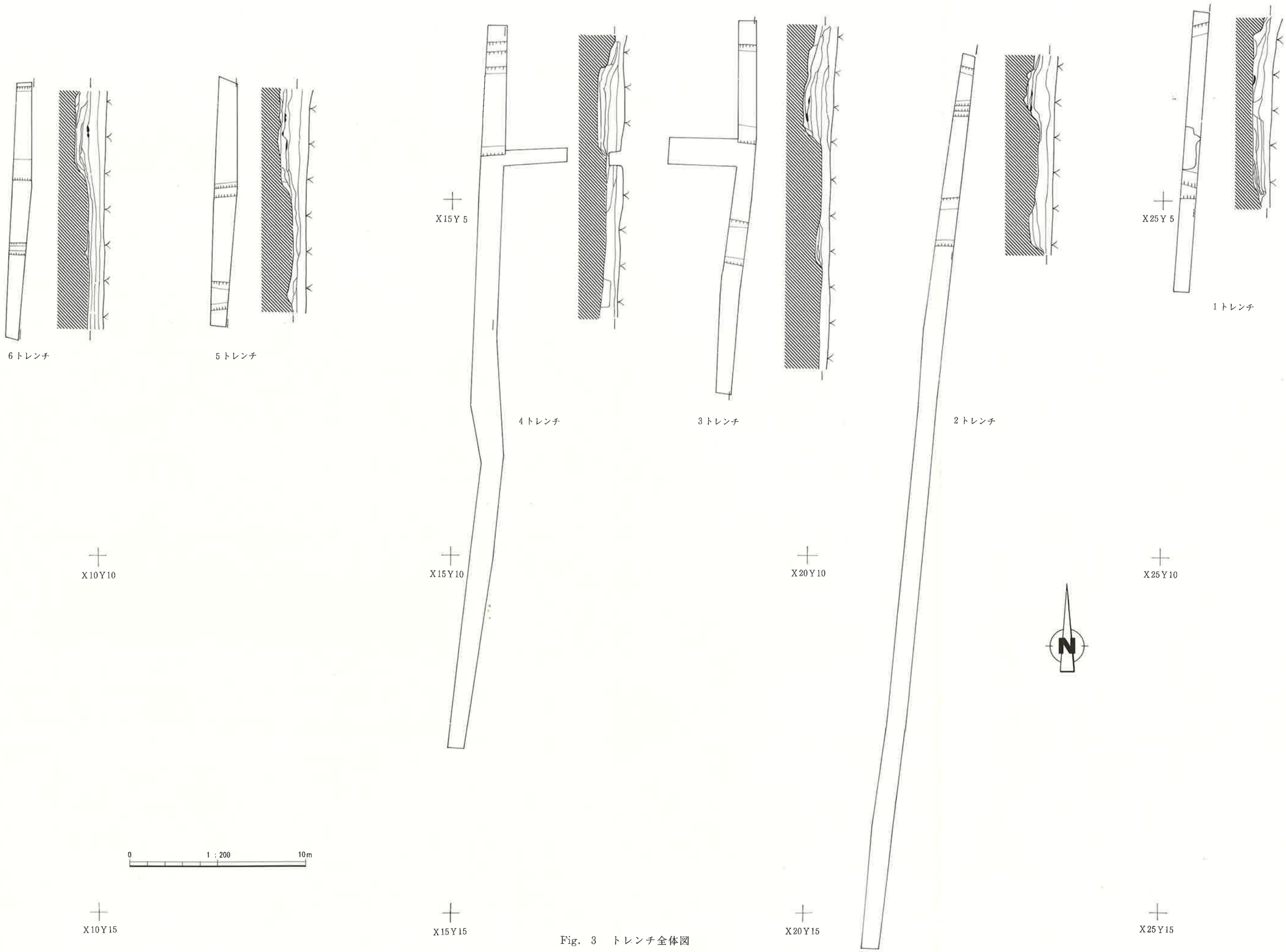
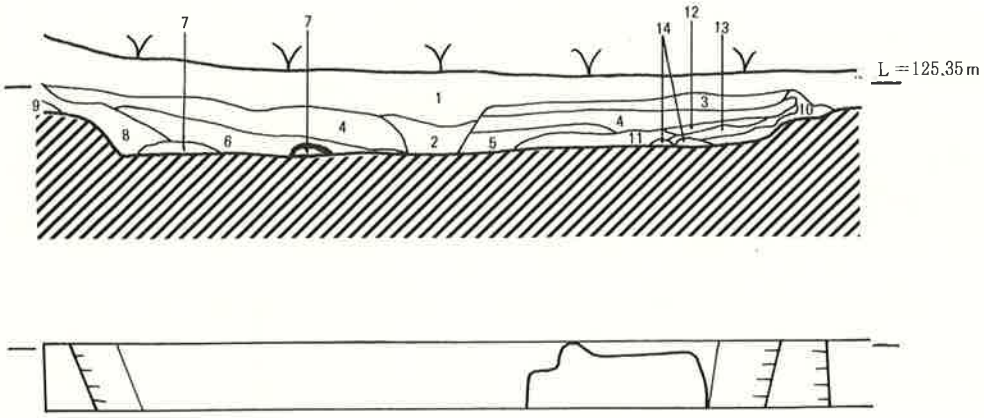
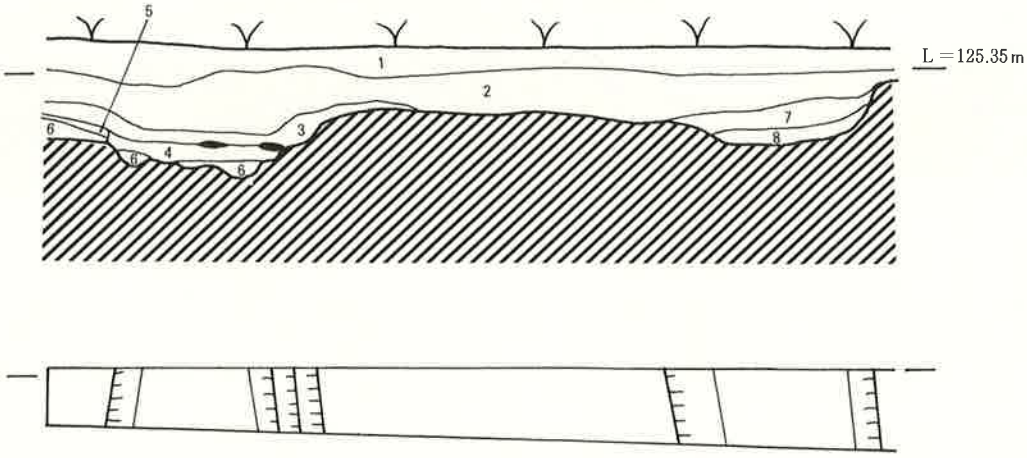



Fig. 3　トレンチ全体図




1トレンチ

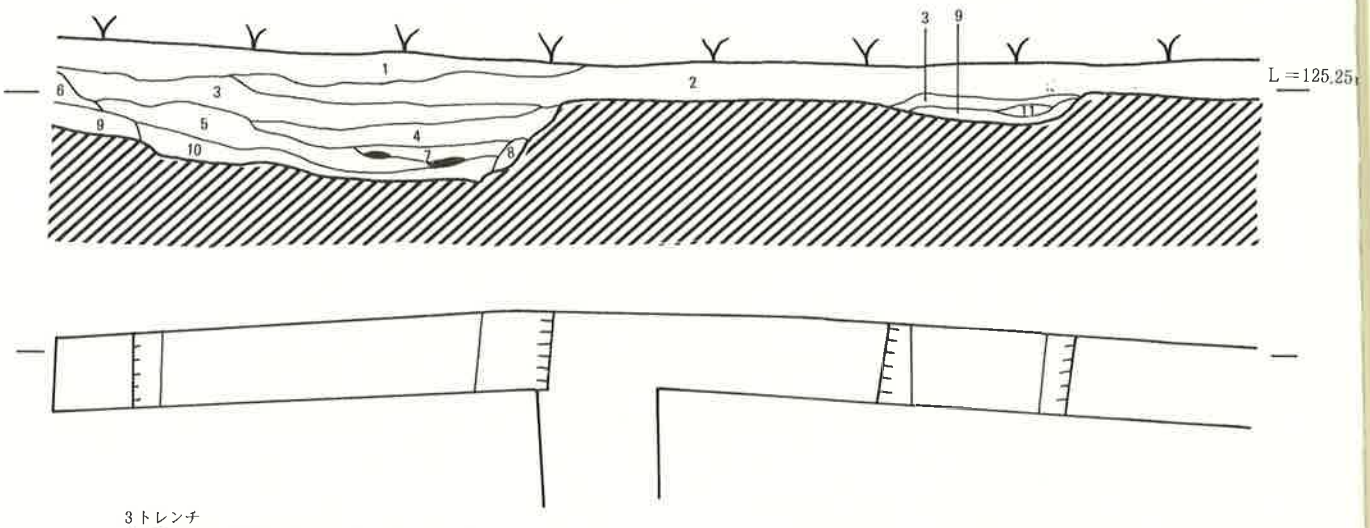
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 層 | にぶい褐色細砂層 | 客土、軽石少量含む |
| 2 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％含む |
| 3 | 層 | にぶい褐色細砂層 | ５㎜大の軽石３％含む |
| 4 | 層 | にぶい褐色細砂層 | １㎜大の軽石１％含む |
| 5 | 層 | にぶい褐色細砂層 | １㎜大の軽石３％含む |
| 6 | 層 | 褐色細砂層 | Ｂ軽石混土 |
| 7 | 層 | 暗褐色細砂層 | 粗砂を含み固く締まっている |
| 8 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％、粗砂を少量含む |
| 9 | 層 | にぶい黄褐色微砂層 | ローム主体の混土 |
| 10 | 層 | にぶい黄褐色細砂層 | ローム主体の混土 |
| 11 | 層 | 暗褐色細砂層 | 黒色土主体にややロームが混ざり、軽石少量含む |
| 12 | 層 | 褐色細砂層 | 黄褐色のローム少量含む |
| 13 | 層 | 暗褐色細砂層 | 黒色土主体にロームが少量混ざり、軽石少量含む |
| 14 | 層 | にぶい黄褐色微砂層 | ローム主体の混土 |
| ■ | 層 | 浅間Ｂ軽石層 | |




2トレンチ

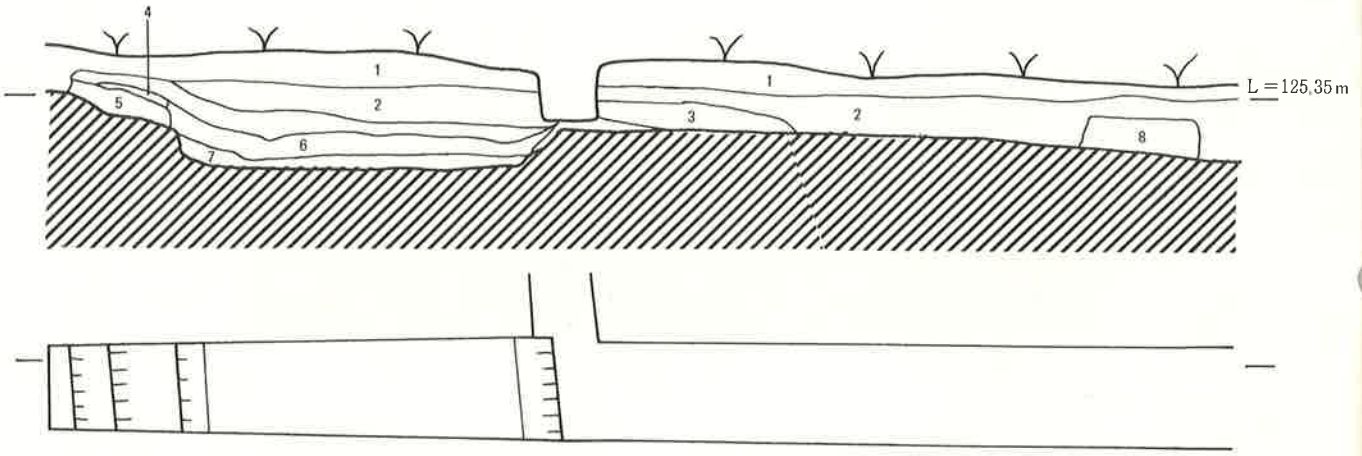
| | | | |
|---|---|---|---|
| 1 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％ |
| 2 | 層 | にぶい褐色細砂層 | ５㎜大の軽石３％含む |
| 3 | 層 | 褐色細砂層 | Ｂ軽石混土 |
| 4 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％、粗砂少量含む |
| 5 | 層 | 褐色細砂層 | ３層よりＢ軽石の割合が高い |
| 6 | 層 | 暗褐色細砂層 | 粗砂を含み固く締まっている |
| 7 | 層 | にぶい褐色細砂層 | １㎜大の軽石１％ |
| 8 | 層 | 黄褐色細砂層 | ロームと黒色土の混土、５㎜大の軽石３％含む |
| ■ | 層 | 浅間Ｂ軽石層 | |

Fig. 4　1、2トレンチ断面・平面図




3トレンチ

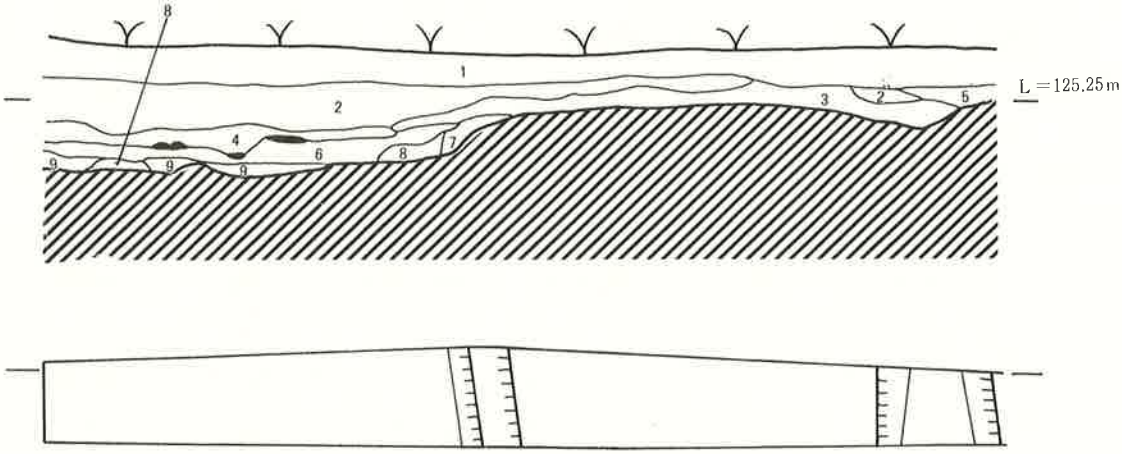
| | | |
|---|---|---|
| 1 層 | にぶい褐色細砂層 | 客土、軽石少量含む |
| 2 層 | にぶい褐色細砂層 | 5㎜大の軽石3％ |
| 3 層 | にぶい褐色細砂層 | 1㎜大の軽石1％ |
| 4 層 | にぶい褐色細砂層 | 1㎜大の軽石3％ |
| 5 層 | 暗褐色細砂層 | 粗砂を含み固く締まっている |
| 6 層 | 褐色細砂層 | 黄褐色のローム少量含む |
| 7 層 | 褐色細砂層 | 軽石1％、粗砂少量含む |
| 8 層 | 褐色細砂層 | 軽石1％、粗砂少量、7㎝大の礫を含む |
| 9 層 | にぶい黄褐色細砂層 | ローム主体で黒色土が混ざる |
| 10 層 | 暗褐色細砂層 | 粗砂を少量含み固く締まっている |
| 11 層 | 暗褐色細砂層 | 黒色土主体にややロームが混ざり、軽石少量含む |
| ■ 層 | 浅間B軽石層 | |




4トレンチ

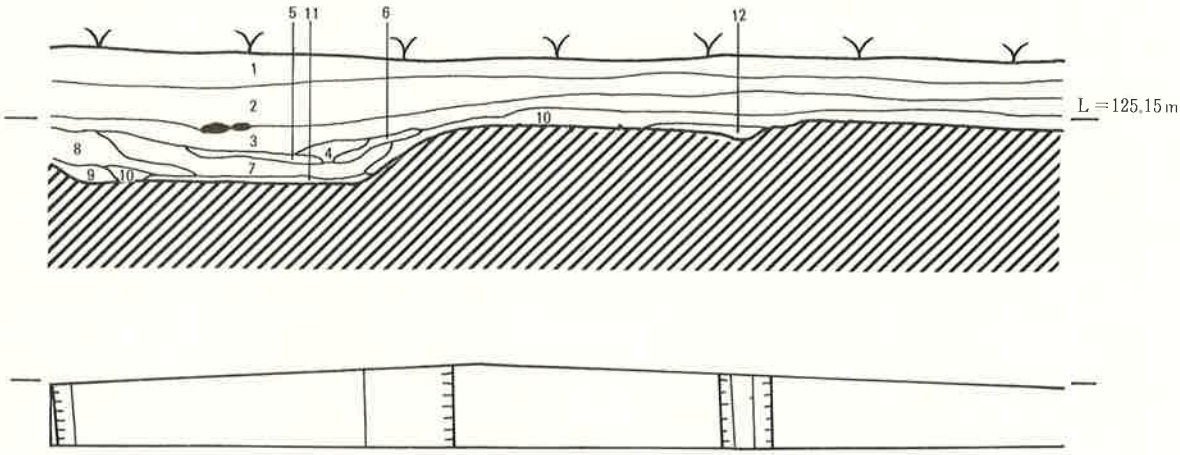
| | | |
|---|---|---|
| 1 層 | にぶい褐色細砂層 | 客土、軽石少量含む |
| 2 層 | 褐色細砂層 | 軽石1％ |
| 3 層 | にぶい褐色細砂層 | 5㎜大の軽石3％含む |
| 4 層 | にぶい褐色細砂層 | 1㎜大の軽石1％ |
| 5 層 | にぶい褐色細砂層 | 1㎜大の軽石3％ |
| 6 層 | 褐色細砂層 | B軽石混土 |
| 7 層 | 褐色細砂層 | 軽石1％、粗砂少量含む |
| 8 層 | にぶい黄褐色細砂層 | ローム主体に黒色土が混ざる混土 |

Fig. 5　3、4トレンチ断面・平面図




5トレンチ

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 層 | にぶい褐色細砂層 | 客土、軽石少量含む |
| 2 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％ |
| 3 | 層 | にぶい褐色細砂層 | １㎜大の軽石１％ |
| 4 | 層 | にぶい褐色細砂層 | １㎜大の軽石３％ |
| 5 | 層 | にぶい褐色細砂層 | ５㎜大の軽石３％ |
| 6 | 層 | 褐色細砂層 | 粗砂が混ざる |
| 7 | 層 | 褐色細砂層 | 黄褐色のローム少量含む |
| 8 | 層 | 暗褐色細砂層 | 黒色土主体にややローム混ざり、軽石少量含む |
| 9 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％、粗砂少量含む |
| ■ | 層 | 浅間Ｂ軽石層 | |




6トレンチ

| | | |
|---|---|---|
| 1 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％ |
| 2 | 層 | にぶい褐色細砂層 | １㎜大の軽石１％ |
| 3 | 層 | 褐色細砂層 | Ｂ軽石混土 |
| 4 | 層 | 褐色粘質土層 | ３層にＢ軽石を含まない |
| 5 | 層 | 褐色細砂層 | 粗砂が混ざる |
| 6 | 層 | 褐色粘質土層 | ４層より粘性が弱く、軽石１％ |
| 7 | 層 | 褐色細砂層 | 軽石１％、粗砂少量含む |
| 8 | 層 | 暗褐色細砂層 | 粗砂を含み固く締まる |
| 9 | 層 | 暗褐色細砂層 | 黒色土主体にややロームが混ざり、軽石少量含む |
| 10 | 層 | 褐色細砂層 | 黄褐色のローム少量含む |
| 11 | 層 | 黄褐色細砂層 | ロームと黒色土の混土、５㎜大の軽石３％ |
| 12 | 層 | 褐色細砂層 | 黄褐色のローム少量含み、締まりあり |
| ■ | 層 | 浅間Ｂ軽石層 | |

Fig. 6　５、６トレンチ断面・平面図

## 3．出土遺物

調査区が限定されたため、遺物の種類も少なく、出土量も少ない。その中で第1トレンチ内で検出された竪穴住居からの土器及び溝の埋土中から出土した瓦を中心に記述する。

### (1) 竪穴住居出土土器

第1トレンチの北から6～9m間に検出された竪穴住居からの出土遺物である。竈前面の床面上からの出土で、須恵器坏4、高台埦2がある。この他に「コ」の字口縁の甕片が伴うことが確認されている。

図示したもののうち、No.1、No.2は比較的大きい径をもつ底部から深い体部で立ち上がるもので、口唇部が外反しないで玉縁となる。特にNo.1は内面黒色土器である。口径：底径の比は、1.97と2.06で古い形を残している群である。

No.3、No.4は底径が小さく、内湾気味に浅く立ち上がり、口唇部は小さく外開きする玉縁状を呈する。土器内面中央は小さく盛り上がりを見せる。口径：底径の比は2.32、2.35と前の群に比較して大きく、酸化炎焼成的な焼きと合わせて、後出的な特徴を示す。

No.5はNo.3・4に粘土紐のはりつけ高台を付したものである。

No.6は墨書を伴う高台埦である。成整形技法は他のものと共通で出土土器の中では最も新しいものとみられる。墨書「丁」は内面に書かれているが達筆である。「丁」が律令制下の「正丁」をさすものであれば、家の住人中の20～60才の正丁の使用する器を意識した「丁」であろうか。

これらを一覧表に整理すると次のようである。

Tab. 2 土器観察表

| No. | 器種 | 口径 | 底径 | 器高 | 胎土・焼成・色調 | 成形・整形・技法等 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 坏 | 〔13.4〕 | 6.8 | 4.6 | 砂を含。焼成良好。内黒色。黄灰色。 | ロクロ成形後丁寧なナデで内外面を整える。 |
| 2 | 坏 | 13.4 | 6.5 | 4.0 | 胎土に小礫・細砂含。焼成普通。灰白色。 | ロクロ痕明瞭。外面ナデ整形。 |
| 3 | 坏 | 〔13.2〕 | 5.7 | 4.1 | 胎土に多少細砂含。酸化炎焼成的。黄灰色。 | 左回転ロクロ痕。3/4残存。ロクロ成形後ナデ。 |
| 4 | 坏 | 〔13.6〕 | 5.8 | 4.7 | 小礫を多少含。酸化炎焼成的。灰褐色。 | ロクロ痕を残すが、比較的丁寧なナデ。 |
| 5 | 高台埦 | 〔13.0〕 | 6.2 | 5.1 | 小礫を含。焼成普通。酸化炎焼成的。暗橙色。 | はりつけ高台。ロクロ成形痕。表面ナデ。 |
| 6 | 高台埦 | 〔15.0〕 | 〔6.6〕 | 〔4.6〕 | 小礫を含。焼成普通。酸化炎焼成的。灰色。 | はりつけ高台。ロクロ成形痕。表面ナデ。墨書「丁」か。 |

注）大きさの単位はcmであり、復原値は〔　〕で示した。

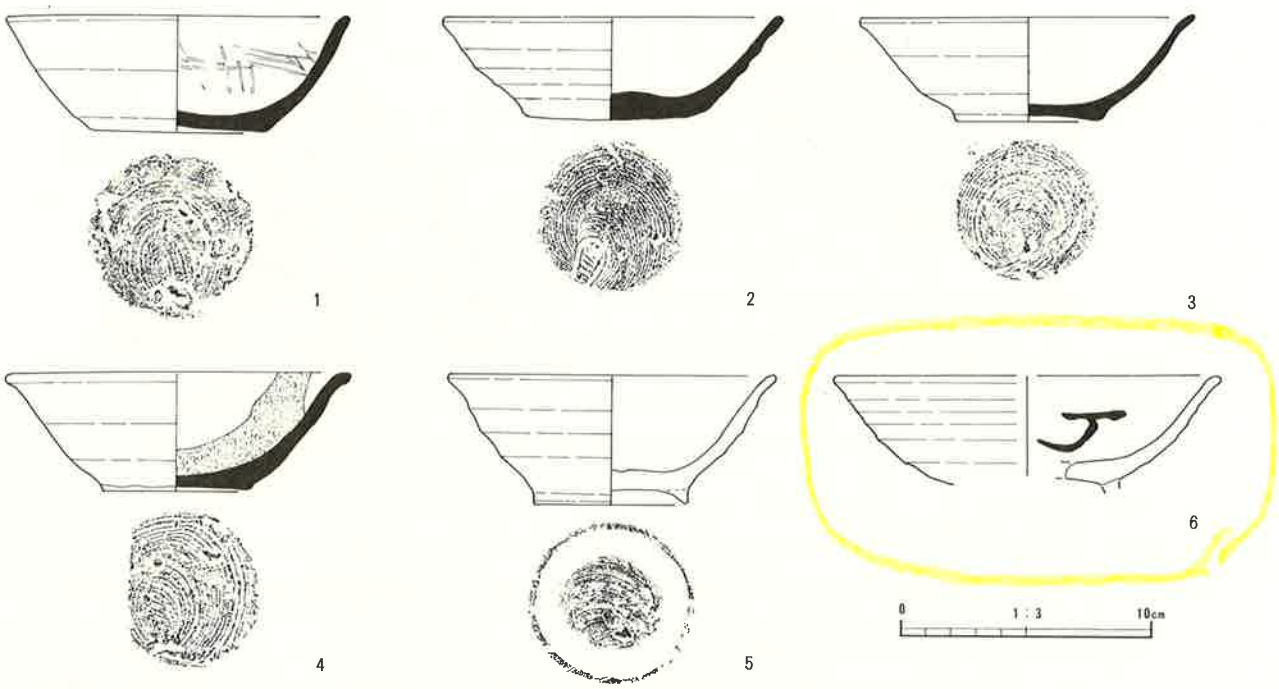



Fig. 7　1トレンチ住居跡出土遺物

## (2)　瓦　　類

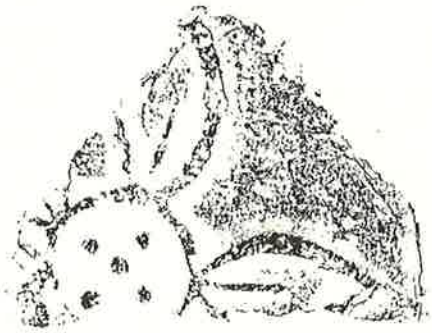
南限溝中からの出土がほとんどで、As－B軽石層下からの出土が目立つようである。これは、寺域南限部分がAs－B軽石降下以前にかなり損壊を受けていたことを物語ると思われる。分布的には第3～4トレンチの中軸線付近を中心に出土が集中している。おそらく南大門などの施設が近くにあるためと思われる。想定中軸線は第4トレンチのすぐ西に当たる部分である。軒瓦が極端に少ないのは、全体を通しての傾向である。西側の第5・6トレンチはほとんど遺物の出土が確認されなかったが、原地形が西に傾斜しており、溝中に崩落した遺物も西へ流れたためであろうか。

各トレンチにおける瓦の出土状況は下表のとおりである。

Tab. 3　各トレンチにおける瓦出土の状況

| トレンチNo. | 出土瓦片 | 特に目立つ瓦等 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 20 | 平瓦（縄目）　1<br>（刻書「井」有）<br>土師甕片1<br>須恵坏1 | 竪穴住居重複 |
| 2 | 90 | 平瓦（縄目）　3<br>天目茶碗底1 | |
| 3 | 115 | 平瓦（斜格子）　2<br>（正格子）　1<br>（縄目）　1<br>土器片3<br>近世徳利口 | |
| 4 | 142 | 平瓦（斜格子）　9<br>（正格子）　6<br>（縄目）　11<br>軒丸片1 | 南大門に近いか |
| 5 | 0 | | 原地形が下がる |
| 6 | 0 | | 原地形が下がる |

住居跡竈付近出土平瓦　刻印「井」



4トレンチ出土軒丸瓦片

Fig. 8　出土瓦拓本

## (3)　出土遺物の時期

出土遺物の時期を確定する根拠は、層序的な観点と土器の形式学的観点に分かれる。

①　層序的にみた遺構・遺物の時期

基本的にはAs－B軽石との関連が問題である。瓦片を出土する溝では平均して溝底より30～45cm上の層序にAs－B軽石が一部純層をまじえて確認される。遺物はその上下両面から出土するが、少なくとも溝の掘られた時期はAs－B軽石降下以前であることが確認される。瓦片の出土層位はAs－B軽石層下が中心であるが、量的にはあまり多くない。

竪穴住居跡の床面層位は前述の溝の埋土中にあり、住居跡が溝の掘削後につくられたことが明らかである。特にAs－B軽石との関連では、軽石混土層下に埋土も入ることからすると、As－B軽石降下時には既にかなり埋没していたものとみられる。道路面とみられる部分を層序的にみると、特に2層下にくることが確認されている。この2層はAs－B軽石降下以降の土層であり、直接路面の露出していた時期を確定する根拠はない。ただ、最も残存状況のよい第3トレンチでは表面に瓦片を敷きつめた部分があり、この瓦片すべてが国分寺瓦であるところから国分寺期に供用されていたものとみることができよう。

②　竪穴住居出土の土器

竪穴住居出土の土器は前述のように2群に分けて考えられる。

底径が比較的口径に比べて大きく、口唇端部が玉縁状を呈するものの、直に開く形の一群である。全体的に土器のつくりも丁寧で、古式を残す一群である。

これに比べて№3～5の一群は、口径に比して底径が小さくなり、体部の開きも直線的で口唇端部が玉縁状に肥厚し、外開きするのを特徴とする。これら一群は要素的には前述の一群より後出的要素としてとらえることができる。

また、破片ながら検出している「コ」の字甕口縁の甕は、やや退化傾向がみえ、後出要素の土器の一群と共伴する例が多い。

以上の点を勘案すると古式の一群の土器は9世紀後半の要素を示すものの、後出的要素をもつ一群の土器を基準に考えると、10世紀初頭頃におくことが妥当と考える。

## 4．まとめ

今回の調査はトレンチ調査ながら従来不分明であった上野国分尼寺の寺域南限の確定という大きな成果を上げることができた。しかも、その状況がかなり特徴的なあり方であることが立証されたことで、その意義は大きい。それを３つの点で集約して述べまとめとする。

### (1) 南辺築垣の構築基盤の造成

調査範囲の限定で完全な形での基盤造成の状況が確認されたものではないが、その立ち上がり部分はほぼ確認された。残存状況のよい部分でみるとローム面及びその上にのる層から鋭角に削り出し、その上に褐色の比較的粘質の強い土層を積む手法をとっている。国分僧寺の例では築垣基部は削り出し部は0.9～1.2ｍにも及び南面からの景観をより雄大に見せる配慮がみてとれる。その走向は多少出入りはあるもののほぼ東西方向をとっていることは明らかで、南限築垣の構築基盤として、入念な細工をしていたことがうかがえる。

### (2) 東西大溝の掘削

最も状況のよいトレンチを中心に東西大溝についてみると逆台形に掘り込まれた溝の規模は上幅5.5ｍ、下幅4.2ｍ内外とかなり大規模でロームからの掘り込みも約１ｍの深さに達している。底面はほぼ平坦である。

埋土をみるとレンズ状に堆積しているところからみると、自然に埋没していった様相がみてとれる。特にAs－B軽石層が溝底より40㎝内外の部分にあることからすると、かなり当初は整備され、溝底をさらうような作業も行われていたものとみられる。

この溝については、国分僧寺の南限部分の調査でも３ｍほどの幅の溝が確認されていることからすると、共通の技法とみることができよう。

ちなみに、この溝からの掘削土は築垣基壇面に積みあげられたものであろうが、築垣基壇面も寺域内部で１ｍを超える高さになり、南側からみるとかなり雄大な築垣が形成されたものとみられる。

### (3) 東西道路の設置

東西大溝の掘削と並行して、東西方向に道路面が連続して検出された。西の国分僧寺と東の国府を結ぶ横断道路の機能をもつものとみられる。最も状況のよい第３トレンチでは、溝底より１ｍ高いローム上面を平坦にし、幅５ｍほどの路面を確保している。その南限には幅2.4ｍ、深さ30㎝のＶ字状の側溝を設けている。

路面上には、部分的に瓦片を敷きつめている部分があり、地面に食い込むように踏み固められている。路面の荒廃を補修するための所作と考えられる。路面幅は必ずしも一定していないが、掘削面の崩落などの影響によるものであろう。また、路面が硬化していない部分が多かったが、これは後の撹乱により表面が剥離したためとみられる。

この道路面が最も東の第１トレンチではローム面が削り取られて竪穴住居跡が検出された。これをみると少なくともこの竪穴住居は道路面を遮断する形で道路を破壊してつくられていることが確認された。その時期は10世紀初頭頃のこととみられるが、この時

期には既にこの道路は機能を失っていたものと考えざるを得ない。

## (4) 寺域の規模

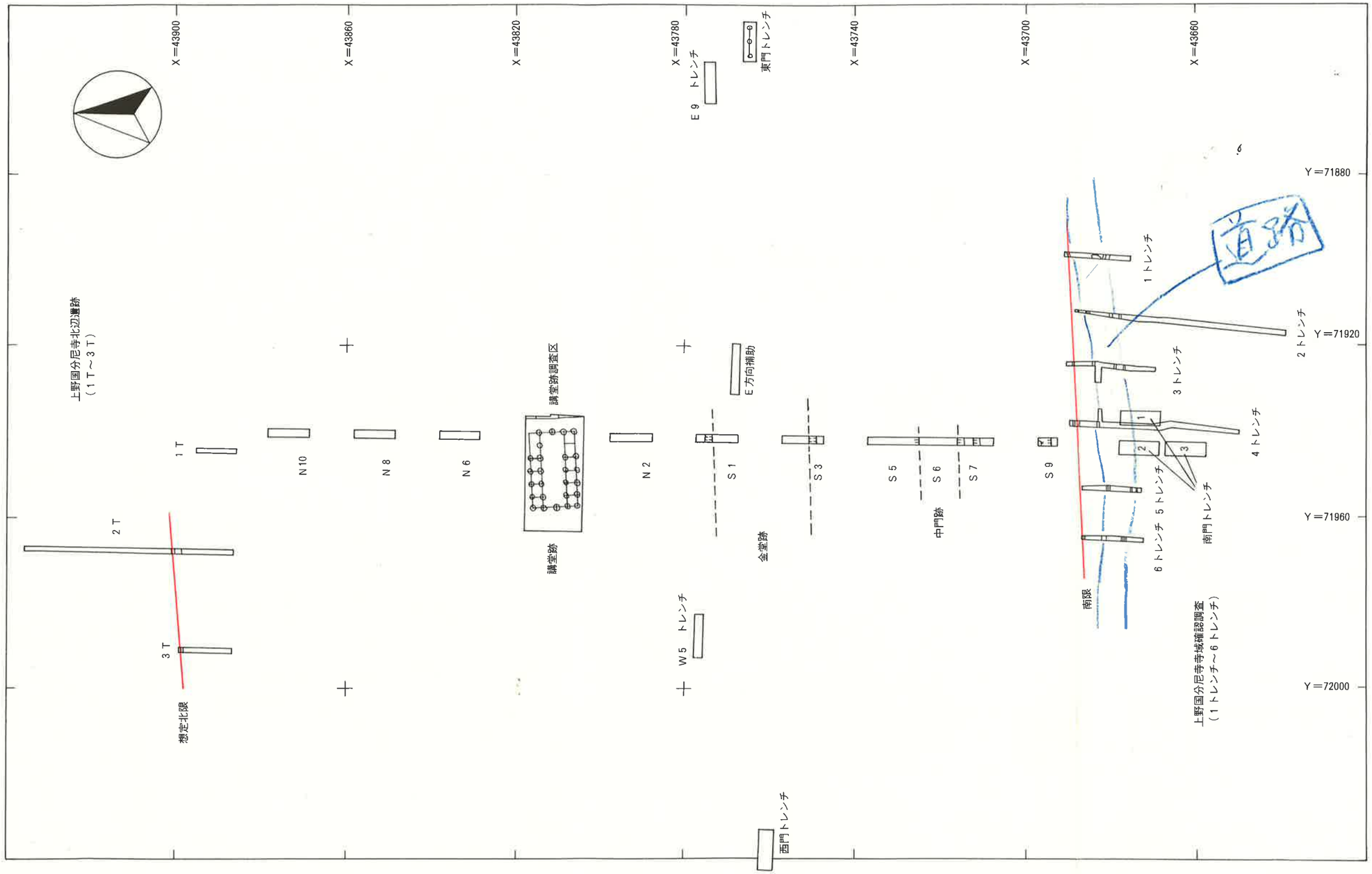
今回の調査では、南限の確認を目的としてトレンチを設定し、調査した。その結果、南限の構造を確認できた。ところで、今回の我々の調査に先立って行われた上野国分尼寺北辺遺跡調査（群馬町教育委員会）で推定北限付近から築垣様の瓦堆積部分及びその外側にまわる小さい溝の存在を確認している。この部分はその位置からみて北限部分と想定されているようである。ちなみに、ここを北限として想定し、そこと今回調査の南辺部分をみるとほぼ2町（1町＝109m）に当たることからすると、両者の調査結果を合わせて南北方向の寺域規模は、2町とみて誤りないであろうと思われる。ただし、東西方向の寺域規模については確定する資料は得られていない。

## (5) 調査成果のまとめ

今まで述べてきたように6本のトレンチ調査で尼寺域南限を確定する確実な資料が得られた。この中で築垣の南に大溝が廻ること、東西に道路が設けられていたことが明らかとなった成果は大きい。特に上野国分僧寺との関連でみても南辺築垣下に大溝を廻すことは共通しているし、その南に平坦な部分がくることからするとこの東西道路は、僧寺と連絡している可能性がある。その目で国分寺中間地域の調査でも道路状遺構を検出したということも、その想定を強化してくれる。

この道路は、各施設が南面からのアプローチを中心に考えられる道路について一石を投じる結果になった。即ち、この道路が僧尼寺を結ぶと共に更に東にある上野国府とも連なる可能性を指摘しておきたい。

この道路が10世紀初頭頃分断されているのは、すでに国府と関連する道路としての機能が必要でなくなったともみられる。整備に伴う上野国分僧寺の調査でも9世紀末に寺域内に竪穴住居が出現していることや、尼寺講堂の遺構面を覆う土層に鍛冶遺構が検出されたことなどを勘案すると、この時点でかなり両寺の破損が進行していたことが想定される。また、この東西道路は、南北に分断する地形を横断的に結ぶ効率性も有しており、主要道路は南からのアプローチであるのに対し、便宜的なものであった可能性もある。そのため、早く分断されたとみられないであろうか。




本図は平成５年群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団発行の『上野国分尼寺・上野国分二寺中間地域』報告書に使用されていた「上野国分尼寺跡調査区図」の各トレンチと平成11年度に群馬町教育委員会が行った上野国分尼寺北辺遺跡トレンチ、今回本調査団が行った南限調査トレンチを記入したものである。ただし、本図作成過程で縮尺等の問題で多少の誤差を生じている。

Fig. 9　上野国分尼寺調査図

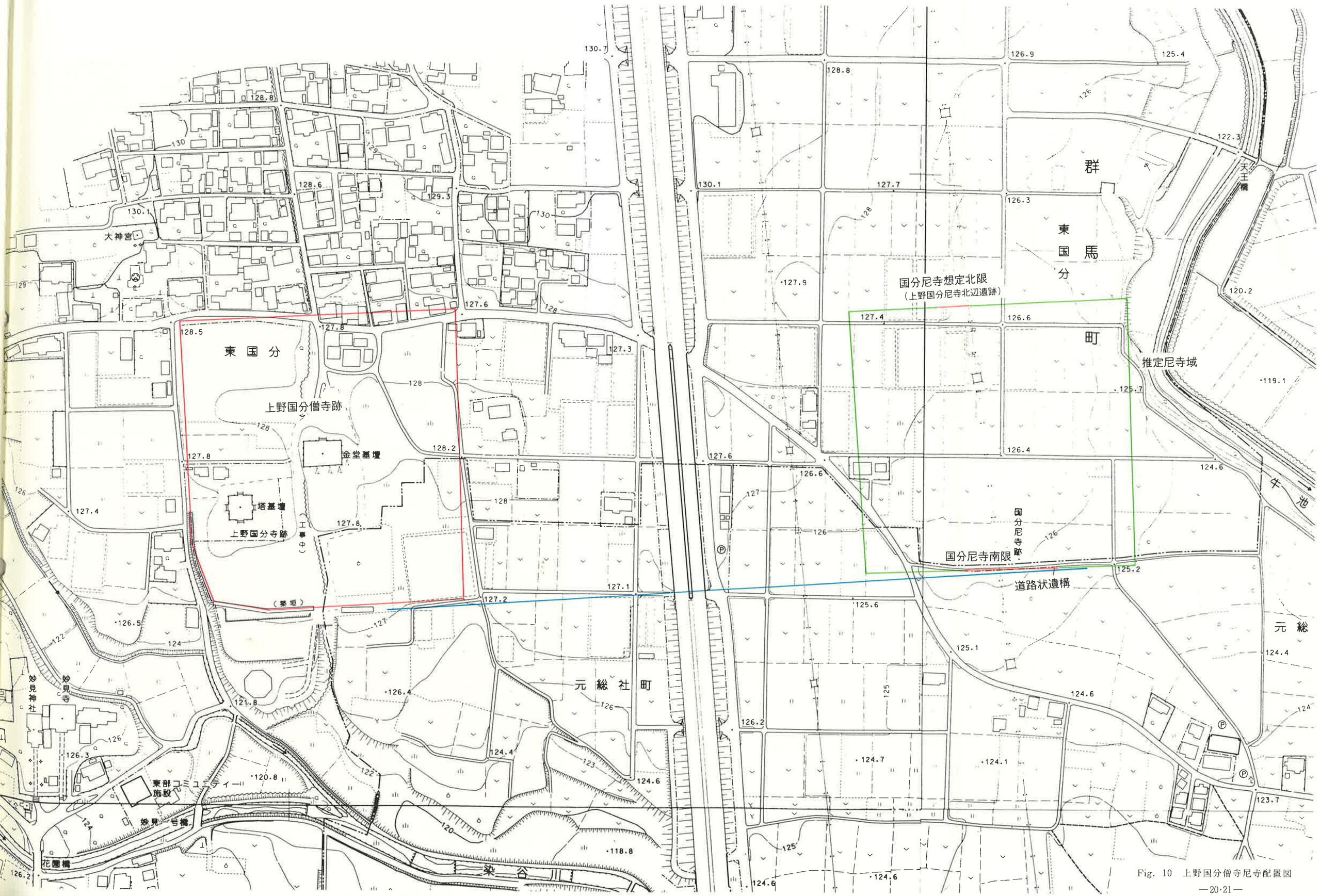



Fig. 10　上野国分僧寺尼寺配置図

1トレンチ全景

1トレンチ北端断面

1トレンチ住居跡全景

1トレンチ住居跡遺物出土状況

2トレンチ全景

3トレンチ全景

4トレンチ全景

5トレンチ全景

6トレンチ全景

調　査　地

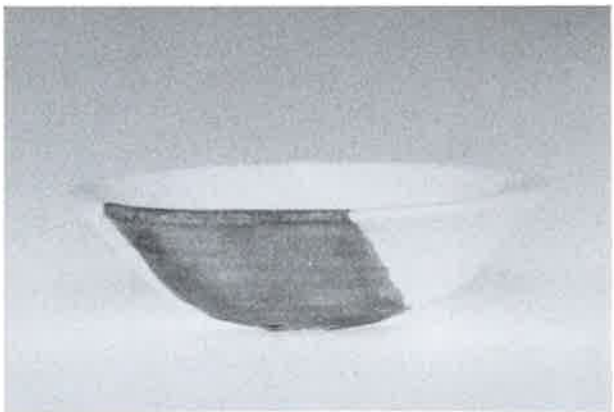
1

2

3

4

5



6

住居跡竈付近出土平瓦

4トレンチ出土軒丸瓦片

# 抄　　録

| | |
|---|---|
| フリガナ | コウズケコクブニジジイキカクニンチョウサ |
| 書名 | 上野国分尼寺寺域確認調査 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 眞塩　明男　　飯田　祐二 |
| 編集機関 | 前橋市埋蔵文化財発掘調査団 |
| 編集機関所在地 | 〒371-0007　群馬県前橋市上泉町664－4 |
| 発行年月日 | 西暦2000年3月29日 |

| フリガナ<br>所収遺跡名 | フリガナ<br>所在地 | コード | | 位置 | | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | | | |
| コウズケコクブニジジイキカクニンチョウサ<br>上野国分尼寺寺域確認調査 | マエバシシモトソウジャマチ<br>前橋市元総社町 | 10201 | 11A99 | 36°23′27″ | 139°01′53″ | 20000308<br>20000329 | 218m² | 区画整理事業 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 上野国分尼寺寺域確認調査 | 寺院跡 | 奈良時代<br>～<br>平安時代 | 住居跡<br>南限溝跡<br>道路状遺構 | 土師器<br>須恵器<br>瓦片 | 上野国分尼寺寺域南限 |


## 上野国分尼寺寺域確認調査

平成12年3月29日　発　行

編集発行　前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664－4
TEL　027－231－9531
印　刷　株式会社　開文社印刷所